ブログ（2018.7）「意識とメタ過程」特集（人工知能学会誌（2018.7））を読んで、の詳細：
http://www.1968start.com/M/blog/index.html#1807b

人工知能学会誌（2018.7）の「意識とメタ過程」特集を読んで

第１次ＡＩブームの時の私の修論（1969～1971）の視点からコメントを述べる。

■この特集「意識とメタ過程」の３番目の解説記事
「統合情報理論から考える人工知能の意識」について、

本解説は、*「意識の情報統合理論に基づき，システムがもつ情報の構造という観点からの意識とその定量化の方法，その意義について，フォトダイオード，中国語の部屋などを題材とした思考実験を通して概説する」*とのことである。

論点をあまり理解できなかったので、５章まで読んだのち、途中をパスして、９、10 章を読み、部分的なコメントを記載。

●解説論文へのコメント

・２章の意識という言葉の意味に関して、
意識の質的側面の説明の本文引用「*『ヴァイオリンの音』、『納豆の匂い』、『味噌汁の味』、『歯の痛み』など、さまざまなものに対してそれぞれ独特の主観的に感じる質、クオリアがある。クオリアの重要な特徴として、言語化不可能であり、他者と共有できない私秘的な体験である*」
↓
（コメント）　これをもって意識の質を定義することには疑問がある。個人ごとに主観的な差があることは想像できるが、それ以上に多くの人間にとって共通する部分があるからこそ、意識的に行われる日常会話が成立していると思われる。

・３章の人工意識を評価する二つの立場に関して、
本文引用「*人工知能それ自身の一人称視点で意識、主観的な体験が存在するかどうかを問題とする立場*」、「*本稿は、・・・、人工知能に一人称の意識があるか否かのみを考察する*」
↓
（コメント）　「主観的」という表現の多用が気になる。「個人的」という表現でよいのでは？「*主観的な体験*」を「個人的な体験」と言い換えれば、「*存在する*」のは当たり前では？
2.1 節の例「*赤色を見たときに主観的に感じる独特の質、『赤の赤らしさ』*」も、過去の個人的な体験に依存するのは当然で、ある赤を見たときに何を連想するかを決定づけていると思われる。
また、たとえば、数枚の夕焼けの写真を見て最も美しいものを選ばせる場合、ＡＩも人間も過去の個人的な体験が影響すると思われる。

（全体的コメント）　９章の最後で「*・・・人間と同様の概念構造を獲得した人工知能が現れたとき、・・・、一人称の観点から意識を持った人工知能と判定するのが妥当*」と述べているが、この

一人称の意識へのこだわりが理解できない。かつて第一次ＡＩブームの時に読んだ「人間機械論」を思い出した。

【私の卒論（1969）からの引用】
http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/soturon.htm
・参考文献
　ド・ラ・メトリ：人間機械論、杉訳、岩波文庫、１９３２（原作１７４７）
・序文から抜粋
『人間はきわめて複雑な機械である。一挙にして明らかなる観念を持つことは不可能であり、
従ってこれを定義することは不可能である。最も偉大な哲学者たちがアプリオリに，すなわち，
いわば精神の翼の力を借らんとして、なしたすべての探究がむなしかったのは正しくこのためである。
かくして，アポステリオリに、すなわち、いわば、人体の諸器官を通して、霊魂の姿を見わけようと試みることによって初めて、人間の本質そのものを明確に発見できるとは言わないが、
この点に関して可能なる限り、最高度の蓋然性に到達しうるのである。
（１７４７　ド・ラ・メトリ）』

『今から約２００年前、フランスの医師ド・ラ・メトリは人間は機械であると考えたが、
　それを実証しようとするには、あまりに絶望的になっていた。彼は結論を急ぎすぎたのだ。』

以上